

1. 先天性嚢胞性腺腫様奇形を呈した死産胎児 2 剖検例についての病理学的検討

(第一病理学) 金澤美穂・柴田亮行・
澤田達男・金田良夫・小林慎雄
(産婦人科学) 熊谷万紀子・
平野郁子・角田新一・武田佳彦
(母子センター) 中林正雄

〔緒言〕先天性嚢胞性腺腫様奇形 (congenital cystic adenomatoid malformation; CCAM) は胎生期の肺内で気道系が嚢胞状に拡張する先天性疾患である。今回、我々は CCAM を呈した死産胎児の 2 剖検例を報告した。〔症例 1〕妊娠 23 週 3 日の死産男児。肺重量は左 39.5g, 右 3.0g で、左肺全体に直径 3mm 以下の嚢胞が多数存在していた。嚢胞の多くは肺泡様の立方上皮で被覆されていた。〔症例 2〕妊娠 23 週 6 日の死産男児。肺重量は左 21.0g, 右 16.0g で右肺中葉に多列線毛上皮で被覆される 50×35mm 大の嚢胞が 1 個存在しており、これに隣接して肺泡様の立方上皮または未熟な円柱上皮で構成される腺管様の小嚢胞が集簇していた。

〔考察〕自験例および文献例から、CCAM の病像は症例によって多彩であることを指摘し、さらに病因および発症時期について考察した。

2. 唾液腺腫瘍における EB ウイルス、熱ショック蛋白 (HSP) 70 の発現

(¹歯科口腔外科学, ²第二病院歯科口腔外科,
³第一病理学, ⁴病院病理科) 丸岡靖史¹・
安藤智博²・横尾恵美子¹・三宮慶邦¹・
扇内秀樹¹・小林慎雄³・西川俊雄⁴

EBV は唾液を介して感染し、既感染の器官として口腔領域では唾液腺が有力視されており、唾液腺腫瘍と EBV との関連の可能性が近年示唆されるようになってきた。高温などのストレスから細胞を守る一群の蛋白質 heat shock protein (HSP) は病原ウイルスと宿主細胞の相互作用のなかで、発現誘導されることがわかってきたが、EBV の感染と HSP との関連に関する報告はない。そこで今回唾液腺腫瘍における EBV, HSP70 の発現を免疫組織化学的に検索し、若干の知見を得たので報告した。唾液腺腫瘍組織における EBV, HSP70 の発現は Warthin 腫瘍、好酸性腺腫の腺腫部分に認められた。多発傾向のある Warthin 腫瘍、好酸性腺腫に EBV が関与し、HSP70 が EBV 感染に誘導され、なんらかの相互作用があると推察された。今後は EBV の局在の in situ hybridization 法を用いて検索し、HSP60 HSP90 などの HSP family と EBV 感染

との関連も検討したいと考えている。

3. 持続的ポリエチレン注入によるラット osteolysis model—骨吸収因子の遺伝子発現パターン分析—

(整形外科学, *第一病理学) 小林啓郎・
金 強中・伊藤達雄・小林慎雄*

〔目的〕人工関節周囲の osteolysis は Mφ が wear debris を貪食し、放出されたサイトカインが破骨細胞性骨吸収 (osteoclastic bone resorption; OcBR) を刺激し生じる。ラット膝関節に polyethylene particle が持続注入される osteolysis model を作製し、病理組織所見とサイトカインの発現をみた。

〔方法〕K-wire を大腿骨骨髄内に刺入し、particle (P) 群では particle を含む血清を注入した浸透圧ポンプを移植 (control は血清) し、接続 tube を関節腔に固定し、2 週毎に 10 週までみた。RT-PCR 法で膝関節肉芽中の TNF- α , IL-1 α , IL-6 の発現を分析し、大腿骨を脱灰後 HE と TRAP 染色を施行した。

〔結果〕P 群 4 週では肉芽が刺入部軟骨面と関節包付着部に侵入し OcBR がみられ、6 週から肉芽が軟骨下骨より骨髄へ侵入した。TNF- α は P 群 4 週から発現し、IL-1 α と IL-6 は 2 週以降の両群に発現した。

〔考察〕この model は osteolysis に起こる肉芽形成や OcBR が短期間でみられ、肉芽の分析が可能である。P 群で OcBR が起こり肉芽に TNF- α が発現し始めたので、TNF- α が肉芽形成と OcBR の活性化に重要である。

〔結論〕長期的な観察や治療の実験にも有用である。

4. Sodium methoxide による CD1a 免疫染色法の検討

(第二病理学)

金木暁岳・木川田弥生・池田郁雄・
榎本浩子・安藤明子・武雄康悦・
増田昭博・山川光徳・笠島 武

〔背景〕CD1a 抗原はランゲルハンス細胞などに表出される。CD1a はそれゆえに Langerhans cell histiocytosis などの診断に有用であるが、パラフィン切片での染色は標本により差があり、凍結切片での検索に頼っているのが現状であった。我々は、sodium methoxide による抗原賦活化 (SM 法) によりほとんどのパラフィン切片で CD1a 抗原の検出が可能であったことを報告する。

〔方法〕材料として皮膚、リンパ節等を用いた。SM 法と対照としての様々な抗原賦活化法を行い、CD1a

抗体 (Immunotech) 陽性細胞数を比較検討した。

〔結果および考察〕SM 法により抗原賦活化を行った標本では、他の方法に比較し、CD1a 抗原が安定して検出され、発現細胞数も明らかに多かった。SM 法による抗原賦活化は通常のパラフィン切片における CD1a 抗原の検出に大変有用であるといえる。

5. 移植肝の病理学的検討

(消化器病センター内科) 野口三四朗・
橋本悦子・谷合麻紀子・林 直諒

肝移植後には様々な病態を併発するが、その診断には肝生検による病理診断が重要で、特に rejection では病理診断が確定診断となる。今回、肝移植後肝生検を受けた32例80標本を対象に、①どのような病態が診断され、② rejection に有用な所見は何かを検討した。組織診断は cellular rejection, ductopenic rejection, 血流障害, 胆道系障害, 原疾患の再発, functional cholestasis, neutrophilic infiltrates, lymphoma, fatty liver, その他, であった。cellular rejection に特徴的な所見の出現頻度は mixed cellular portal infiltrate (89%), bile duct damage (89%), endothelitis (57%) で mixed cellular portal infiltrate と bile duct damage が有用な所見であった。また移植後の肝生検診断は多岐にわたり、いくつかの病態を併発し診断の困難な症例もあった。

6. 膵ランゲルハンス島におけるコレシストキニンの発現とその発生学的検討

(臨床生化学検査科, ¹消化器内科学, ²第一病理学)

清水京子・白鳥敬子¹・加藤陽一郎²・
渡辺伸一郎・小林楨雄²・林 直諒¹

膵ランゲルハンス島 (ラ島) の発生段階で種々の消化管ホルモンが出現することが知られている。我々はラ島におけるコレシストキニン (CCK) の発現につい

てラットを用いて検討した。免疫組織化学染色で CCK 様免疫活性は B 細胞内に局在し、逆相 HPLC で膵内の CCK の主な分子型は CCK-8であることを確認した。また、RT-PCR, in situ hybridization によりラ島内に CCK の mRNA の発現が確認された。発生学的に胎生期のラ島に CCK 様免疫活性は認められず、生後21日目頃より明らかとなった。これらの結果から、成熟期ラットの膵ラ島に CCK 産生細胞が存在することが示唆された。

7. 低血糖を引き起こした insulin-like growth factor II (IGF-II) 産生腫瘍の病理学的検討

(第二病院病院病理科, *第二内科学)

相羽元彦・肥塚直美*

big IGF-II 産生腫瘍による低血糖 (NICTH) の病理学的問題点に、① IGF-II 免疫染色の診断的意義、②しばしば腫瘍あるいは肝転移巣が巨大化してから低血糖となる理由の解明がある。

〔材料と方法〕他施設より検討する機会を得た肝細胞癌 (HCC) 6例、胃・直腸・膵癌・胸膜腫瘍・悪性線維性組織球腫・線維肉腫などの9例である。抗 IGF-II 抗体 (天野製薬) を用い ABC 法・LSAB 法で染色した。

〔結果と考察〕HCC 以外の9例は Golgi 野に IGF-II 染色性を示した。肝転移巣の発育により低血糖を来した胃癌では、原発巣でも腺管形成部の基底側 (血管側) ではなく、管腔側の細胞質 (Golgi 野) が染色され、また管腔内容物の染色性は乏しく分泌障害が示唆された。粘膜内癌も IGF-II 染色性を示し、胃癌発生初期からの IGF-II 産生性が示唆された。胃癌一般における IGF-II 染色性を見るために種々の分化度・深達度を示す胃癌50例の IGF-II 染色を行ったがいずれも陰性であった。HCC の IGF-II 染色性は乏しく、big IGF-II の Golgi 装置での M-6-P 受容体との結合と lysosome への移行・水解処理が推測された。